



*Die Sterntaler. Illustration Gertrud Caspari (Kommt ins Märchenreich, Alfred Hahn's Verlag, Leipzig, 1952)*

ゲルトルート・カスパリ（1873-1948）は、20世紀前半に活躍したドイツの児童書挿絵画家です。

星の銀貨

DIE STERNTALER

グリム兄弟

楠山正雄訳

むかし、むかし、小さい女の子がありました。この子には、おとうさんもおかあさんもありませんでした。たいへんびんぼうでしたから、しまいには、もう住むにもへやはないし、もうねるにも寝床がないようになって、とうとうおしまいには、からだにつけたもののほかは、手にもったパンひとかけきりで、それもなさけぶかい人がめぐんでくれたものでした。

でも、この子は、心のすなおな、信心のあつい子でありました。それでも、こんなにして世の中からまるで見すてられてしまっているのです、この子は、やさしい神さまのお力にだけすがって、ひとりぼっち、野原の上をあるいて行きました。すると、そこへ、びんぼうらしい男が出て来て、

「ねえ、なにかたべるものをおくれ。おなかがすいてたまらないよ。」と、いいました。

女の子は、もっていたパンひとかけのこらず、その男にやってしまいました。そして、

「どうぞ神さまのおめぐみのありますように。」と、いのってやって、またあるきだしました。すると、こんどは、こどもがひとり泣きながらやって来て、「あたい、あたまがさむくて、こおりそうなの。なにかかぶるものちょうだい。」と、いいました。

そこで、女の子は、かぶっていたずきをぬいで、

子どもにやりました。

それから、女の子がまたすこし行くと、こんど出て来たごどもは、着物一枚着ずにふるえていました。そこで、じぶんの上着をぬいで着せてやりました。それからまたすこし行くと、こんど出てきたごどもは、スカートがほしいというので、女の子はそれもぬいで、やりました。

そのうち、女の子はある森にたどりつきました。

もうくらくらなくなっていましたが、また、もうひとりごどもが出て来て、肌着をねだりました。あくまで心のすなおな女の子は、（もうまっくらになっているからだれにもみられやしないでしょう。いいわ、肌着もぬいであげることにしましょう。）と、おもって、とうとう肌着までぬいで、やってしまいました。

さて、それまでしてやって、それこそ、ないといつて、きれいさっぱりなくなってしまうとき、た

ちまち、たかい空の上から、お星さまがばらばらおちて来ました。しかも、それがまったくの、ちかちかと白銀色をした、ターレル銀貨でありました。そのうえ、ついでしたがた、肌着をぬいでやってしまったばかりなのに、女の子は、いつのまにか新しい肌着をきていて、しかもそれは、この上なくしなやかな麻の肌着でありました。

女の子は、銀貨をひろいあつめて、それで一しよ

うゆたかにくらしました。



ターレル銀貨は、15世紀から19世紀にかけて欧州、特にドイツ語圏で広く流通した大型銀貨（直径40mm、厚さ2.5mm、重さ28g程度）で、17～18世紀における1枚の価値は、当時の食料品などの価格から換算して現在の2～4万円程度と試算されています。

従って、仮に「女の子」がターレル銀貨を10kg拾って運べたとしても360枚程度、つまり現在の価値で1000万円程度にしかありません。

それに、そもそもこの「女の子」なら、会う人にせがまれるまま、すぐに全てを渡しきってしまいそうです。

まあ、童話についてこんな計算をすること自体「野暮」というものかもしれませんが…。